

橋詰良一著

「家なき幼稚園の主張と実際」より (十)

第十七 使丁の廃止

学校というような教育者の機関に附属して、往々教育を崩壊するものに「使丁」「小使」という老人がいます。

この老人は、ずいぶん、強硬な青年学生達をもへこませる程の手強さをもっていますが、小学校の児童などが、この老人に追い回されている気の毒さときた日には、とてもお話も何もあつたものではありません。

いたずらに好漢であつても、教育に何らの理解をもたないで、動きもすれば教師をさえ叱責するような亡状をあえてする者があります。その上に掃除というのを、義理か役かのようにしておいて、更に眞の衛生など考えもしないのが普通です。

このような老人のために教育界は、どれだけ混濁させられてい

るかを多く考慮においた論議がないようですが、私は教育の機関をととのえる上において必要な一項目であると考えているものです。

殊に、私の子どもの国のような、姉さまと母さまとの共同になる愛の道場では、婦人の使丁（おばちゃん）という人の働きの良否がどれ位大きな影響を全体に及ぼすかはいうまでもないことで、私は絶対に「おばちゃんなし」を理想としていたのでした。

おばちゃんなしの主義

おばちゃんという特別な階級の人に園や庭を清める作業をまかせておくからいつとはなしに子どもが掃除を軽視する慣わしになります。お母ちゃんや先生たちと一緒に箒をとつてお掃除をすることにしたら、そこに渾然として一つになった浄めの作業の心

持ちが徹底します。

だから、最初からおばちゃんをおかないで、いかなる労役も作業も母さまと先生と子どもとが一緒にする習慣をつけたいと願っていました。

とにかく、おばちゃんという者には老輩が多く、学校の使丁と同じように無理解な人の多いのも余儀ないことで、若い先生をもとうとする私たちの幼稚園では、一層難儀なことが多くなりやすい。

#### 中途で廃止する困難

しかし、開園の最初には、どこでもこの特別な労役者の雇い入れを紋切型にして、優しい道場に不快な小言の種子を播いてきたものであります。

それを種々な事情から一番最初に廃止したのが雲雀丘で、次が箕面でありました。

別に、経費節約というではなしに、主義のために勤続者を廃止するという困難な予想以外のもので、とんでもない流言、蜚語をさえいわれるようになりました。

が、廃止して後の気持ちのよいこと、仕事の行届くこと、子どもまでがお掃除を共にすることなど、かぞえられない程の良所が

発見されました。

日記の一節をあげます。

◇おばちゃんをやめて

操子(箕面)

おばちゃんなしになってから、今日で四日目です。朝のお掃除は早出当番の先生が朝早くから来て、一生懸命してくださいませし、帰りのお掃除は三人が手を合わせてしますから近ごろ集合所の内も外もほんとにきれいになりました。

自分がするからそう思われるのかも知れませんが、見るから清々としています。

子どもたちははじめは私たちが割烹服かつぷをきて箒を持ったり、雑巾をもったりすることを不思議そうに見ていましたが、このごろではよく手伝ってくれます。

私たちが、箒を持てば、水をまいてくれます。ちり取りも持ってきてくれます。ジョロのとり合いに困る程みんな水まきが好きです。

それにうれしいことになんでも自分でかたづけられるようになります。お砂遊びをしてもあとをちゃんとおかたづけしますし、あの大きな木レンガも、ヨッサヨッサとしまってください。スケートも押入れへじょうずにしまえます。

人にたよる習慣をつけたらいつまでたっても人手をかりなければ

ば出来ないものが、自分でしなければならぬと自覚した時、こんなにも違うものかとつくづく感じさせられました。

ほんとに近頃の幼稚園は美しい清い空気に包まれています。先生と子どもが一つになっています。何の邪魔もありません。なんといううれしさでしょう。

もう少しするとここへ母ちゃんもはいつていただきます、この暖かいまどいの一人に……。

おばちゃんなしになってからの第一の失敗

渡辺先生がかぎを部屋の中にしたまま、外のカンヌキをおろされましたので、みんな中へはいることが出来ません。渡辺先生は心配です。でも、金物屋さんにもちょうど合かぎがありましたので、やっと開けることが出来ました。後からみんなで大笑いしました。

「もしはいれなかったらどうしただろう」と。



## 第十八 郊外から都市へ

郊外をそのままの園舎として、野の子どもの国を創設することにもかくも成功することの出来た私は、もっとも古くから心の底の願いとして持ち続けていた、大阪市のような都市の幼児を、この緑の世界へ導いてやりたいという願いがどうしてもおさえられなくなってきました。

大正十三年九月に私は、「家なき幼稚園」を大阪市のまん中に開設して、自動車で全市の幼児を集めてこれを野の中へ連れて出ようとする實際案を発表する機会に出会うことが出来ました。

当時、私の発表した趣意書の冒頭に書いた文は、簡単ながら実に私の歓喜にふるえる涙の文字です。

### 大阪家なき幼稚園趣意書

おとなの理くつから割り出した園舎などという家や建物から幼児を解放して純真な大自然の中で、伸び行く子どもたちの生命を思いのままに伸びさせようとする私の家なき幼稚園は三年來各所で実験されています。池田に、箕面に、十三に幼児はただ小

鳥のごとく蝶のごとく、歌い、舞い、遊ぶうちに天地のはぐくみをつけていく、彼らの身心のゆたかさを見るにつけて、いつも思いくらべられるのは窮屈な大都市の子どもの生活でした。

それでも子どもは四囲の脅威に、妨げられながらも相応の発育を続けています。ちょうど岩と岩との間に根を下した果敢な松杉を見るように健気に意地つよく育っては行くものの生命の伸長に余裕がない。

幼児の生活には人間生命の基調が宿されているのです。そして人間健康の胚種はいしゆが培われるはずなのです。

大きな戦りつと願求をもって、私の「家なき幼稚園」を大阪市部の幼児界に適用すべく決心したのは今年の春からでした。

都市幼児の郊外保育、私の終生の大希望として実行に指を染めようとした、この計画になくてはならないものは自動車です。しかも特殊の設計と容積とをもった自動車です。

特殊の自動車によっていく度にも幼児を郊外に導き出そうとする試みは都市の幼児にとつても、都市の保育研究にとつても、必然に到来すべき大効果を予想することが出来ると確信しました。そして私はこの自動車の恵与を神に祈りました。

神がついにその祈りをいれて、神都林間学舎の名で帯谷翁の手から立派なのを授与されました時、私はただ泣くばかりでこ

ざいました。それは四月のことでした。

自動車の建造にも開園後の運転にも、私の趣旨に共鳴して一生を捧げようという子ほんのうの善き人が得られました。そして保育一切の園務を引き受けてみようという善き保母をも恵まれました。

「大阪家なき幼稚園」はこうして開園するまでの機運に到達いたしましたが陰ながらの庇護ひごを私に与えられているものは本山彦一翁です。

五月に来阪されたアメリカのパートカーズト女史からの計画を激賞して別記のメッセージを今橋ホテルから私に寄せてくださった時に私は始めて教育界の公許を得たような心地がいたしました。

しかしすべての成否は大阪市民諸氏の了解と援助に待たなければならぬのでございます。大阪市における幾万の幼児のために、私は切にこの試みの成功を祈るものでございます。

これに保育の要点を附記した規則書を全市に配布して秋の十月から開園したのですが、当初の寂ばくな状況は今も笑い話になっている程です。

自動車を選ぶまで

私が自動車を選ぶまでにはずいぶんながい考慮といろいろの詮議とを続けました。

最初は都会の子どもを郊外に運ぶために市の電気局と交渉して特別の時間に「幼児電車」を運転してもらおうかとも話したり考えたりしました。また市内バスと協定して特別の賃金で「幼児バス」を運転してほしいと考えたり、いったりしましたけれどもそれは、いずれもこの繁劇な市の交通状態からみて不可能なことであることは明りょうです。

かつて大阪市の川々に巡航船の走っている頃、特別の「幼児巡航船」で安治川の下流や淀川の上流にある野原へ臨時の子ども会をひらきたいと考えた時でさえ、ほとんど営利会社の一考をも得ることの出来なかつた経験をもっている私は、今の時代に、この「幼児電車」や「幼児バス」の自由のないこともよくわかつていますので、百万憂慮の結果、どうしても自分が幼児のための自動車をもつより他はないという帰結をみるに至りました。

しかし、そのような願いが容易に実現しようとは夢にも思っていなかつたのですが、かねて児童を伊勢の社の地につれて行って自然の間に敬神の念を培うことにとめていらした「神都林間学舎」帯谷翁に私の苦しい心のうちを話したのが動機となって、突

然自動車を建設してくださることになったのでした。

それにはまた別に半年間の揮発油迄添えてくださったのです。

#### 開園と無反響

こうして、大正十三年の秋に首尾よく開園を発表しましたが、新聞や雑誌には、珍しい計画として相応に大きく紹介されたにもかかわらず、一、二ヵ月の間は、ただの一人の照会者もなければ入園者もなく、さすがに強い心をもって事務で忙しく働いてくれる約束であつた主事役の保母までが、悲觀しきってしまう程の寂ばくな状態を続けたものでした。

最初は主任の保母に若い保母を三人程として、主任の保母を園の経営の主事ということにしました。

他の野の幼稚園とは違つて、この幼稚園の経営にはすこぶる複雑な事務があり、また、会計上の用務もありますので、年輩の婦人でなければまかせることが出来ない関係上、はじめから主事という名をつけてそれを主任保母としたわけですが、若い娘が多くなるにつれて、その主事先生も次第に若い方へ引きつけられ、時には若い者以上にはしゃぎまわる程の元気をみせられました。

### 三月目から入園増加

三月目から不思議な程の多数の入園者が一度に現われて、翌年の四月からは急に百人を越す状態となりました。

幼児が多くなつた喜びと共に、急に行きづまりを感じたのは自動車でした。自動車は別項にその内容を示す通りの特別な大自動車で、幼児は三十人も、三十四、五人もらくに乗れますが、それで、大阪市を三度かけ回ってもわずかに百人より輸送することが出来ません。それに相應の保育時間も各班にあてておかねばならず、また不時の故障も見っておかねばならないので、結局は車輛の増加という事に帰着いたしました。で翌年の秋には更に一輛の自動車を購入したわけで、現在（昭和三年春）は百七十人の幼児を豊かに収容するまでの機運に達しました。

しかし、遠からずして更に車輛の増加を続行しなければ到底大阪の幼児界に貢献するなど口広くはいわれない実状です。

### 自動車の内容は

自動車は図の通りのシートに出来ていて運転手の席に接近した両側のシートが大人席で、一方は保母、一方は父兄席とし、その他が全部幼児席となっているのです。

この車の車輛の中には、左のようなものが積み込まれ、野でも

原でも好きな所を幼稚園にして保育を実行する工夫がしてあります。

一、オルガン 一、テント 一、軽便腰掛数十 一、遊戯具類  
一、綱引きの綱 一、旗 一、恩物類 一、救急箱その他

現在ある二輛とも大よそ同様の形式をもっていますが、機械は前のがフォード、後のがシボレーです。

### 運転の系統

大大阪の全体に六十余ヵ所の幼児集合所があります。入園者は最寄りの集合所を指定して一定の時間にそこへ出ていますと、自動車を迎えに行つてその子ども達の一つの班を定まった野へつれていきます。

そして保育がすむとまたもとの所まで自動車を送つて来てくれるわけになっていますから、家庭人はそこまで迎えに出ていれればいいわけです。

こうして自動車は、一の組を野に送つておいてまた、二の組を迎えにまわつてそれを野に送り、更に三の組を迎えて野に送つて行つた時分には、ちょうど第一の組の保育がすむ時刻になるので、それを家々へ送つてから引きかえて第二を送りかえず任務につき、更に引きかえて第三を送りとどける任務につくという

わけです。二つの車がこうして繰り返して行けば六班までは出来るわけで、それで幼児が家を出てから、家へ帰るまでがおよそ四時間半位になります。時間からいえば普通の幼稚園児とほとんど同様になっているのです。

最初に予定した時の予想時間配当は、およそ左の通りでしたが、大体において少しの支障もなく実行されていきました。(図省略)

#### 自動車幼稚園の長所

自動車で子どもを集めて子どもを送るといふ輸送機関に附属して「大阪家なき幼稚園」には左のような長所を偶然にも発見することが出来ました。

一、毎日子どもを家庭人からうけとって家庭人へかえす組織であるために園と家庭との間に親密な連絡が出来ます。この園の母さま達が一人がてに結合して熱心な大きな母の会を組織されているのもその一例です。

一、初めから「小使なし」が実行されています。そのかわり運転手や助手というような毛色の変った職員がいて、放縦な職業の習癖上困った結果をみないであろうかと案じていました。が、可愛い子どものために何時とはなく子ほんのうな「にい

ちゃん」になってしまつて一にも二にも子ども、大切の考えを先にするようなよい傾向をみるに至りました。

一、前記の通りこの人々を子どもには「にいちゃん」と呼ばせておりますが自動的にも他動的にも絶対安全律だといわれる九マイル以下の速力励行もこの子ども可愛い心のから遺憾なく実行されています。

一、子どもが家庭をあとにして全然大人の援護から切りはなされるために「きさんじ」な子どもになって先生との間が、特に親密になるような傾向をもちます。

一、最初の月に親と別れる時、泣く子はあつても大てい十分間位でまぎれてしまつてその後は毎日毎日この車を喜ぶこと、それはほとんど想像も出来ない程熱心な愛着をもつて待ちます。

一、遠距離をかけまわるうちにあらゆるものを観察する自由をもちます。

まだまだ書いていけばいくらでも数えられますがこの辺でとめておいて参考のために次の疑問を紹介しておきましょう。

#### 自動車への疑問

この園を開いた当時に(又現在までも)諸方面から聞いた疑問

の諸点をならべてみましょう。

一、自動車は危険でないか。

一、自動車は子どもの発育に悪い影響を与えはしないか。

一、自動車に乗りあるく子ども達に放浪的な習性を与えはしないか。

一、自動車になれるため非常にぜいたくな習性をもちはしないか。

まず以上が最も普通で最も有力な疑問であると思われませんが、それに対しての解答を申し上げます。

一、自動車の性質上危険を連想されることは余儀ない事でありましょうが、いろいろ調査研究を試みた結果によりまして、自動車自身からおこす障害でも他から自動車に加えられる障害でも九マイル以下の速力を厳守しさえすれば決して避けられない場合のないことは一般に認められていますから、それを厳守させる事が出来れば心配はありません。けれども早い機械を遅く使うということは使用としての心理上耐え難いに違いないので私の心配もかなり強いものであります。が、幾年の経験によって理屈よりも何よりも、子どもを大切に思う心が完全にそれを履行させる事実を見て今はまったく安心しております。また現に開園以来唯一度の障害にも出会

わなかつたのが何よりの証拠であります。

一、震動のかかりに強い乗り物として自動車が子どもの発育上に懸念されることは当然のようにも思われますが、開園に先だって私は東京学習院の幼稚部に於ける状態やその結果をあちこちでしらべてみました。ここの子どもはほとんど自動車をもって通院しているので、その衛生上に何らかの故障がないかを調べるのがなによりであると考えたのですが、ついに医者からも技術者からも、悲観すべき材料を聞かれなかつたのであります。

一、放浪的の性質をもつか否やの疑問は恐らくは遠くへ行きあらくという連想から想起されることで別に深い根拠ある疑問ではないようですが、不健全な機会を児童の心性に植えつけない限り距離という問題が大人の連想する程、左様に大きな影響をもつものだとは思得ないのであります。殊に自動車で走って行く子どもにとっては、ほとんど距離の観念を絶しているかも知れませんから。

一、自動車に乗ることがぜいたくであるというようなことは大人のみので考えることで子どもにはぜいたくも何もあつたわけではありません。これは全く一顧の価値もない疑問であります。



以上でおよそ自動車への消極観は排除し得たものと信じますが、なお、幾重にも慎重の研究を続けたものと祈っておりませう。

純真な子どもを運ぶ自動車係の記した日記をお目にかかけましょう。

#### ◇自動車日記

二十六日 月曜日 雨後晴 新学期より六回運転になってから、非常に時間が忙しい。また身体もとうてい永續するか否やあやしまれるほどつかれる。しかしまた一方に於てあのアドケない幼児たちが喜び勇んで自動車の来るのを待ち受けていそいそとるようすをみる毎に、ちょっとでも幼児の喜ぶ様に運搬してやりたく思う。

われわれ自動車係のものは不規則な運搬を無理にしたくはないが、前の日より認められない不意の故障とか余儀ないパンクなどは皆人の知る所の自動車につきものの持病である。それで各集合所に知らせてある往復の時間には、出来るだけ遅れない様努力している。そうでないと少しでもおくれると保護者の人々に事故でもありはしないかと不安を抱かせるから、我々にはそうした心配をかけるのが一番辛いのである。近時日毎に増加して来る自動車の数は実に素晴らしいものである。それにひきかえ今日大阪の道路

はちっとも広がらない。都市計画による二十四時間道路も前途なお遠く、自動車のはしる数が増加する毎にそれだけ道路が狭くなってくる訳である。ありとあらゆるモーターが電車をおい抜こうとして先を競ってお互いに腕をふるって芸とうをやっている。この渦中にはいって大事な坊ちゃん嬢ちゃんをのせた幼稚園自動車なんてあぶないと、人々から異様な目で見られるのも無理のない事である。しかし辛なるかな、創立以来久しい間たいした事故のないのは全く恵まれている次第です。天の神様が我々操縦者の眼となり腕となり足となって助けてくださるのだと信じてほんとに喜んでおります。

(大正十五年)

#### 訂正

七月号、日本幼稚園協会主催の幼児教育講習会のお知らせで、勝部真長先生の講演の演題に、「倉橋惣三先生の透導保育」とありますが、誘導保育の間違いですので、訂正させていただきます。

(編集部)